

沖縄の洗骨調査ノート

Field Note on Washing-Bone Funeral Ceremony of Okinawa

崔 吉 城

東亜大学 東アジア文化研究所
dgpyc081@yahoo.co.jp

キーワード：草墳、洗骨、葬式、宮古島

チョボン
「草墳」



韓国草墳と筆者



全羅南道：コザの人形の死霊を洗う巫俗儀礼1969

私が初めて洗骨を調査したのは1964年8月である。韓国文化人類学の祖と言われる恩師の任哲宰先生に同行させていただいて、韓国西海の蝸島民俗調査をした時であった。島の西

海岸の山道をかなり歩き、休んだ時、7～8個ほどの墓群が見えた。それは平地に棺を置き、その上に藁葺の屋根をかけてあるものだった。当地では「草墳」と言われていた。それが後に学術用語になった。墓と言えは韓国では埋葬の円墳だが、それとは異なるものなので異様な感じだった。しかし、すでに10年前に韓国・国立博物館主催の1954年8月の西海島嶼学術調査¹により、私は「草墳」の存在を知っていたので、関心も高まったのである。当時任哲宰先生も私もカメラは持っていなかった。

私は観察記録を『女性東亜』に報告した²。形、大きさ、方向などを調べながら近づいた時、悪臭がした。この草墳はこの島の周辺の島々と海岸である扶安地方にも存在すると聞いた。1968年7月には全羅南道の草島で8～9の草墳と墳墓、幼児死のための石積墓も見ることができた。その時羅老島など朝鮮半島の南部で散見出来ること、存在していたが今では消えたことを確認した。以降学界で研究がなされた³。それは朝鮮半島の南部が二重葬制文化圏に入っていると主張されるが、私は祖霊や祖先を崇拝する葬制として注目した。特に骨を洗うという死者との再会、死穢の浄化と、あの世へ送るといふ信仰があり、それが巫俗信仰と密着していることを明らかにした。

私は2008年3月22日(土)に沖縄大学で行われた日本映像民俗学の会の第30回記念大会で「宮古の洗骨」を発表した。稀な写真であると高評

を得たが、異見もあった。沖縄の民俗学者の比嘉政夫氏は1974年に洗骨葬を見たことはあると言ひ、写真を撮ることはしなかったと言った。つまり死者と遺族のプライバシーを侵害すると思ったからだという。参加者たちから研究とプライバシーとはどんな関係か、死者に失礼だという「死人格」の倫理、カメラの暴力、なぜ外部の人が沖縄を撮るのかというウチナンチューの反発のようなことも含み、激論となった。結局マイクが私に回ってきた。私は「死者の人格」から肖像権を考えることは貴重なコメントではあるが、許可を得て参加し撮ったことであることを明らかにした。しかしその後、写真資料として発表することはせず、今日に至った。

与論島の葬儀と洞窟墓

その後1972年12月に日本に留学し、その半年後、1973年7月13日から24日まで国立音大の内田るり子教授の紹介でシルクロード史の長澤和俊教授(1928年生)が代表とする鹿児島短期大学南日本文化研究所の与論島総合学術調査団に参加、同行することができたのは望外の幸運であった。東京から西鹿児島まではやぶさ号で23時間、また3500トンの船、ひかりで与論島へ20余時間の距離、しかし船は途中台風にあい、徳之島に寄らざるを得なかった。そこで二日間、ユタ調査を行うこととなった。鹿児島県大島郡徳之島町母間反川で初めてユタの満ツル氏(69歳、1904年生)と亀津南区の咲山カメ氏(1904年生)にインタビューした。私は内田るり子先生のグループで森有度⁴、松村、森安の3氏と同行した。

その後暴風の中2300トンのハイビスカス号で夜8時ころ与論島に着いて、与論海中公園センターで夕食、泊まった⁵。前日の波高は3メートル、風は強かった。翌日朝9時過ぎ与論町役場2階の会議室で「与」というマークがあるユニフォームの15人の役員から島の紹介などがあつた。結局二つの島での調査ができた。バナナ、パイナップル、ソテツ、サンゴ礁の島、殊にグラスボートで透けて見えるサンゴ礁と熱

帯魚は美しい。稲作が主でありながらサトウキビが特産である。私が沖縄に関心を持ったのは韓国への南方文化の影響であった。1968年韓国文化人類学会全国大会では韓国文化の起源が大きく話題になった。南方文化の影響云々は北方説が一般的な歴史学者たちの反発を受けたのはもちろんである。しかし他方面から研究への刺激を与えたのは良かったと思う。

そこで偶然に葬式を観察することができた。座葬だった。死体を運ぶ棺は四角い正方形である。従って棺は四角、埋葬してから3-7年後、掘り出して洗って骨壺に入れておくという。白米と塩と豆などを供えて、親族が泣き歌を歌う⁶。



参列



与論島葬儀 弔問



座葬の棺



墓づくり



座葬の棺の運び



哭き歌、録音中



参列



墓づくり(↑)と祭壇(↓)



飲福



供物：米、塩、豆、水

森の中の細道を歩き、島の南部の崖下にある自然に出来た穴のギシと呼ばれる洞窟に案内された。1メートルヘイベイの二つの穴から見える一つの洞窟の中を覗いて見た。目測でおよそ300個の白骨があった。明治時代に伝染病で亡くなった死体が主であるという説明を聞いた。頭骸骨はやや小さく感じた。一つの洞窟に死体を入れて肉が腐った後、骨を洗って他の洞窟に入れるという。明治初期頃までは、死体もこのギシに持っていくがギシの入り口や崖下に置き、3～4年して洗骨後ギシに納めたという⁷。

日記

1975年3月20日午前10時発30分遅れ東京から沖縄行き出発JAL901便で2時ころ那覇空港着、琉球大学へ、ユースホステルにて宿泊

21日 旅館の主人が那覇空港へ送ってくださり、8時5分503便で宮古島へ出発 9時ころ着、八洲旅館へ、2000円払う、調査打ち合わせ墓、御嶽などを見て歩く

22日 10か所の御嶽、インタビュー、写真と記録

23日 祥雲寺の岡本氏と会う。俄雨

野口武徳先生到着、大林太郎先生らと一緒に現地人と夕食

24日 成城大学学生とゼミ与儀氏宅訪問、録音

25日 御嶽をサンプルにして調査を提案、OK

来々軒で昼食、夕食の時に大林太郎先生のお話

26日 雨、御嶽調査、ユタをインタビュー
参加者：小島、藤井、矢島、古宮、村川、上川、松田、中村、小林、杉浦、白水、村山、蕪木、高橋、崔

27日 松田、小林、杉浦と保良の海へ

銭湯で体重110斤(66キロ)、風邪をひいた

28日 宮古市役所訪問、インタビュー

29日 朝9時から外間氏宅で前日亡くなられた外間メガ氏(享年79歳)の葬式を、午後は1972年7月24日亡くなられた外間喜亮氏の洗骨を観察記録、午後6時からパイナガマ海岸でキャンプファイヤー

30日 朝7時、海岸清掃、12時別れの挨拶
午後1時40分発JALで東京へ

1975年8月26日小島氏と寝台車はやぶさ号で午後4時45分出発

27日 午後2時45分西鹿児島着 5時沖縄行き「東京丸」で東京出港

28日 午後1時20分沖縄着 中央館ホテルにて宿泊

29日 午後5時沖縄出港

30日 午前6時30分宮古島着、八洲旅館宿泊

31日 松原村でシャーマン調査

4日 午前中狩俣へ行き、午後3時50分宮古島空港発、沖縄空港発6時10分、羽田空港夜9時10分着



1975年3月29日に宮古島平良市、右端は野口武徳先生

宮古島の洗骨

外間メガ氏(享年79歳)の杉の木材で作った座葬棺には「故外間メガの柩」「昭和五十年三月二十八日享年七九才」と書かれている。遺体は座ったまま髪を梳いて、洗って、白衣を着せて座位のまま棺に入れる。遺体を埋葬して数年経過してから取り出して洗って再葬するのは韓国の草墳と同じ文化である。

同日、午後には1972年7月24日亡くなられた外間喜亮氏の洗骨の調査をした。

以下1975年3月29日に宮古島平良市下里で撮った洗骨葬の現場写真を公開する。撮影してから半世紀近く過ぎており、ここで研究史料として発表することとした。外間家をはじめ住民の方々にお礼と了解を求めたい。

写真：外間メガ氏(享年79歳)の葬式



葬式参列



墓に納棺



葬儀参列



運棺



洗骨用の水運び



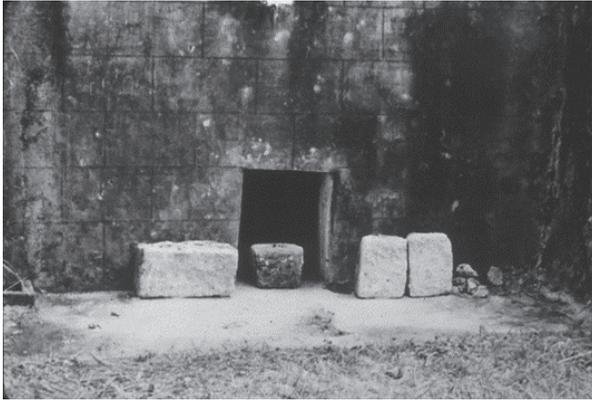
出棺と清め



祭壇



墓開口を待つ



洗骨の前



死者の妻が触る



墓の中側から棺を押して出す



棺から黒色の骨を出す



骨を出して棺を外す(左) 洗う(下右)



頭骨を洗う



髪の毛を別に



骨壺の蓋

洗骨が学問的に関心を持たれたのは古い。洗骨とは遺骸を埋葬、あるいは曝葬して、ある程度期間保存した後に遺骨を出して洗って不浄を清めること(『日本民俗辞典』)、遺骨を



骨壺に下骨から入れる



骨壺を墓に入れる

洗って清める葬送儀礼(『民俗の辞典』)をすることである。日本では早くから、1885年に林若吉氏により20余行書かれた「宮古島の洗骨」によって知られるようになった。

洗骨は沖縄を含め琉球列島、台湾原住民、中国(湖南湘江の流域、吉林など)、韓国の西南地方、インドネシア、フィリピン、メラネシア、ポリネシア、オーストラリアなど環太平洋地域に広く分布している。金子エリカ氏は風葬

という曝葬は単葬であり、複葬の1次葬とは区別すべきであるという。

洗骨は複葬の一部ではあるが二次葬、二重葬、移葬、改葬、再葬とも呼ばれている。それに注目するのは葬法として葬制の発展的起源説、あるいは伝播説による分布、それとは関係なく、死穢という不浄と浄化の観念、靈魂観に関するものである。稲村賢敷氏は死体を捨てる風習から発生したという起源説を提言した⁸。国分直一、原田敏明、江坂輝男、諸氏は縄文時代末期の甕棺が洗骨との関係があるのではないかと主張した。南中国から甕棺葬が入った時副葬も一緒に入ったという。凌純聲氏も同様な意見であった。

韓国で洗骨葬である草墳を現地調査して初めて報告したのは私である。私の報告は後に恩師によってオリジナリティは認められ、調査研究が進んだのは確かである⁹。後に国史編纂委員会刊行の『韓国史論』29の「韓国史研究の回顧と展望 VII - 民俗篇 -」には「草墳と葬禮については崔吉城の〈南海島嶼の草墳〉¹⁰と明記している。私は洗骨自体よりもそれと巫俗儀礼との複合関係、つまりシッキンクツ(洗霊祭)という巫俗儀礼に関心があった。柳田国男、最上孝敬、堀一郎の諸氏に刺激され、研究を進めていた。特に堀一郎氏の「死者と死霊・祖先その人と祖霊との間に明確なる観念上の差別、清穢二様の感覚上の区別を生じて以後に案出せられた慣習であることは間違いない¹¹」という点から私の研究を進めている。最後に故内田り子先生、故野口武徳先生のご恩恵に再度感謝し、今新たにご冥福をお祈りします。2017.5.3

～註～

- 1 国立博物館『韓国西海島嶼』(国立博物館特別調査報告第一冊)、1957 : 95-96
- 2 崔吉城「南海島嶼의 草墳」『女性東亞』10, 1968 : 226-230
- 3 韓相福・全京秀「二重葬制와 人間の 精神性」(『文化人類學』2, 1969), 李光奎「草島の 草墳」(『民族文化研究』1969), 李杜鉉「葬制와 관련된 巫俗 研究」(『韓國文化人類學』6, 1973),
- 4 内田り子・森有度「沖永良部島のわらべ唄」鹿兒島短期大学南日本文化研究所紀要, 1972
- 5 최길성 「与論島の 민속」『샘터』1973년 10월호
- 6 崔吉城著 館野哲訳『哭きの文化人類学—もう一つの韓国文化論』勉誠出版、2003 ; 酒井正子『奄美・沖縄 哭きうたの民族誌』小学館、2005
- 7 喜山莊一《与論だけの“あの感じ”を言葉にする》《与論・奄美・沖縄(琉球弧)の“同じ”を発見する》
<http://manyu.cocolog-nifty.com/yunnu/2009/04/post-b20e.html> 2009/04/29
- 8 稲村賢敷『宮古島旧記並史歌集解』1962
- 9 李光奎「草島の草墳」『民族文化研究』3 高麗大学校民族文化研究所、1969 ; 李杜鉉「葬制와 관련된 巫俗 研究」(『韓國文化人類學』6, 1973),
- 10 「남해도서의 초분」『여성동아』10, 1968
- 11 堀一郎『民間信仰』岩波書店、1951 : 222